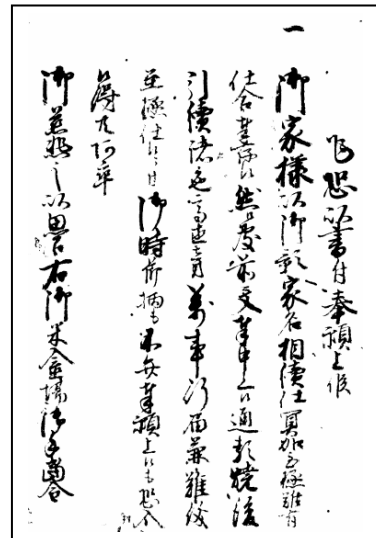


文章を読む2



前回の続きです。(C)は、**冥**は上が「冫」、真ん中に「目」か「日」があって、下が「大」(第3回で出てきた**魚**(魚)を覚えている人は「𠂔」?と思うかもしれませんが)、書いてみると**冥**? “何となく「冥」という字のよう



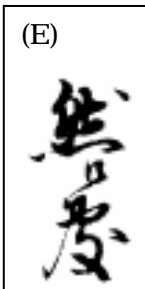
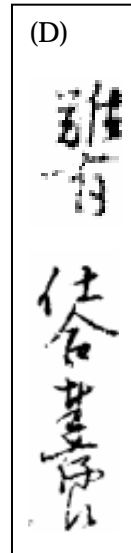
だ”となったら、しめたものです。**加**は「加」ですから「^{みょうが}冥加」となります。

次の**至**は、筆の動き方を見ると**至**という感じですから、第2回で出てきた

至(屋)の「尸」を除いた部分に似ている。その下の**極**は、偏が木偏か手偏?、

^{つくり}旁は**至**という感じでしょうか。中に**子**があってその両側にゴチャゴチャあって、下に「𠂔」という感じの字で思い当たるのは「極」?。すると、2文字で「^{しごく}至極」。上と合わせると「冥加至極」となり、意味(非常にかたじけないという意味)が通ります。

(D)の部分は、第4回にやりました。「^{ありがたきしあわせ}難有仕合奉存候」。説明は省略します。



(E)の部分は、頻出する言い回しです。**然**が「然」、**處**が「處」という字で、「然ル處」(しかるところ)となります。「處」は「処」の旧字体です。「処」が「所」になって「然ル所」となるときもあります。

(F)は**前**が「++」に**𠂔**のような感じですから「前」? **文**は一つ点が多いような気もします(「々」という字が入っているかもしれませんが)が「文」でしょう。なお、**𠂔**に似て**取**というよく出てくる字があります。これは「所」という字です。**取**という字も紛らわしいです。これは「取」という字。さて、(F)に戻って、「前文」の次の4文字は、第4回の応用で**奉**が「奉」、**申**が「申」、**候**は「候」ですから、**上**は雰囲気で「上」となります。



まとめると「^{もうしあ たてまつ そろう}奉申上候通」(申上げ奉り候とおり)となります。